

(一) 第九回 大綱時報

本誌の發展について  
大綱時報

兵助田助助

横浜開港資料館

編集・発行/横浜開港資料館(財横浜開港資料普及協会)  
横浜市中区日本大通3番地 TEL231 電話(045)201-2100

発行日/平成6年2月11日  
刷印/株式会社 平井印刷所

# 横浜開港のひざば

YOKOHAMA ARCHIVES OF HISTORY NEWS

今回の「横浜の近代農村」展は、明治以降の横浜の農村が近代化・都市化にどのように対応しようとしたか、あるいはどのように変化させられたかを解明しようとするものである。いろいろな内容のテーマで本展示を象徴する資料を例示しにくいが、橋樹郡大綱村の『大綱時報』はその一つに数えられる。

文字が一部の農民の占有になつた近世と比較して、近代農民はこれを一様に利用するようになつた。大正後期はそれまで地主の小作農民に対する温情でしのいでいた農村の窮乏問題が激しさを増し、個々の経営の自立が重要視されてくる。そのため一般的には、経済的には産業組合の振興、思想的には勤儉・互讐の精神の普及などが盛んにおこなわれるが、政治的には村の政治への理解喚起という方向となる場合がある。村の統計『村勢要覧』が毎年作成されるようになるのもこのころである。『大綱時報』の発刊はそのような時代背景と連動している。

飯田助知家藏  
飯田助助

『大綱時報』第九号(大正十一年五月二〇日発行)

## 飯田助夫と『大綱時報』

島青年義団を組織し明治三十一年(一八九八)二十歳の時に幻灯器を購入している。当時の農村青年会で独自に幻灯器をもつたものは少ない。活用法は不明で

あるが、講習会や娛樂等に用いられたことは間違いない。二十

四歳の彼は農事講習会の同窓会である橘樹郡農友会の設立メンバーで発行されている。内容は戸数割(村税)調査、役場・学校・青年団の便り、徵兵検査、農産物品評会と児童成績品展覧会、在郷軍人会分會軍隊内宿泊行軍記事、時事評論、「駄句ろう会」俳句、こともの文、など村の出来事や芸芸などにわたる。

当時の村の資料で村民にいきわたりものは、多くが手書きでガリ版刷りである。活字は『村勢要覧』か、教科書・新聞・雑誌などで、新聞・雑誌も一部の家でしか購読していない。『大綱時報』が出回ることは村のパブリック・リレーションの上から画期的な出来事である。横浜市域でこのような村の新聞は他に確認されていない。

飯田助夫というのちに代議士として自らの村を離れることが生まれながら、学業などによって自らの村を離れることがなかった彼は、日常のなかで他の名望家の子弟とはことなつた

議院議員に当選した。広報活動が助夫の政治生活の一部の準機関誌『市政春秋』の発刊に関与。多くの時評談対談、俳句を掲載した。十一年には衆議院議員に当選した。

広報活動が助夫の政治生活のすべてではない。しかし名家に生まれながら、学業などによって自らの村を離れることがなかった彼は、日常のなかで他の名望家の子弟とはことなつた「大衆性」をそなえていたことと思われる。広報活動への理解はそのあたりに起因するのでは

ないか。横浜市選出の農村部出身の代議士のたどった道程の解明は、彼の日記の解説会として現在進行している。(平野正裕)

# 「横浜の近代農村」展

## 展示資料から

今回の展示は、市内外の多くの資料所蔵者のご協力により開催が可能となつた。横浜開港資料館の展示で農村を真正面から取り扱つた企画は初めてであり、展示物としては初公開資料が展示だけでは解説が不十分な、いくつかの資料を紹介しよう。

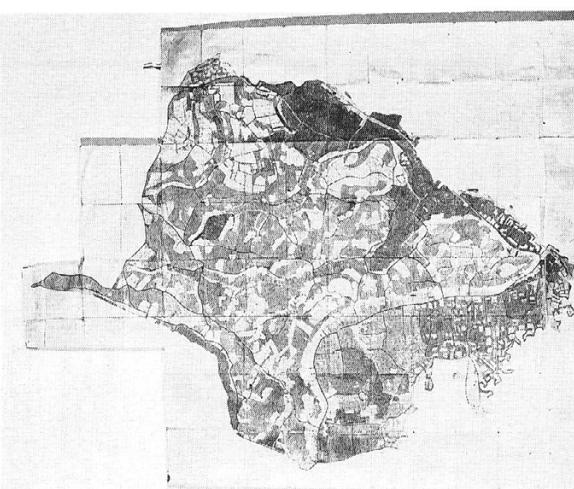
### 新田村吉田全図

地租改正は、一筆ごとに土地を測量して地籍図（地引絵図）を作成し所有者を確認、その等級をさだめて地価を算出し、地価に応じた地租を賦課して豈図に左右されない安定した土地収税をめざした明治維新的土地変革であつた。当時の日本は農業国であり、資本主義化をめざしていたが、その財源は地租にもとめるしかなく、維新政府の緊急課題でもあつた。

都筑郡吉田村では明治八年（一八七五）六月に改租事業がすすめられた。地籍図の作成とともに作られた台帳である「田畠外段別取調野帳」の年月から判断される。吉田村の改租事業は都筑郡下でも他村に先立ち着手されたものであるが、その進捗については藤沢東洲『吉田沿革史』（大正元年稿・昭和五八年刊）に詳しい。租率の軽減

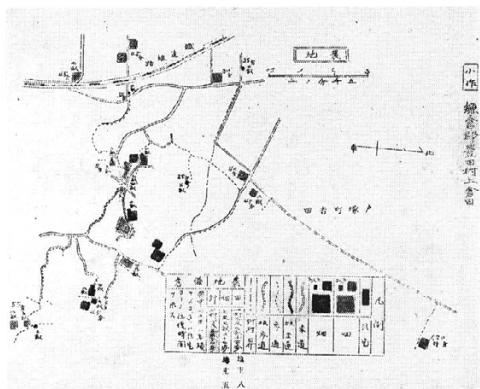
もありうるとの内容をもつ地租改正条令については、「百姓ハ大喜祝デ一日モ早ク成功シテ新税ノ施行ヲ希ハント思ヘリ」。県庁からの督促もあり着手してみたが、「我々が始メテ出会いシタ検地繩入デ少シモ様子ガ知レヌ」。測量は十字繩の繩入法をもち、「都合四五人ヲ以テ一組ト為シ実地ニ臨」んだ。

「逸々縦横ノ間数ヲ帳簿ニハ字持主迄記入シテ」記録は会所に集められ、一番から六千番まである地番を地籍図にとどす。その場合地図より他へ飛ん



(上)新田村吉田全図 加藤憲一家藏

（左）鎌倉郡の小作農家の農地所在図



ではならない。「中々六ヶシイ仕事デ、幾辺遣り直シタカ知レヌ」。この地籍図の作成については相模より二人を雇い入れ調製したが、「只早イヲ専一トシタ故、絵図面ハ甚不出来」な結果となり「後日境界論拵生」することとなつた。はじめての改租事業に手を焼く担当者のすがたがうかがえる。「新田村吉田全図」は以上のような試行錯誤のなかで作成されたのである。本展示では、さらに明治一四年の陸軍省着色迅速測図、昭和一五・一六年の横浜市作成の分区図、戦後の航空写真から吉田地区を拡大して掲示し、都市化・宅地化により変貌する農村のありさまを表現している。（港北区新吉田・加藤憲一家藏）

農会が編集・刊行した『神奈川県下における自作及小作農家四十六ヶ所の農舍及農地に関する現状』という資料がある。長い題名が示すとおり、県下の農家の農舍と農地についての調査である。B4判大・臘写版印刷で、農地や宅地に着色が施されている。発行部数はそれほど多くはなかつたにちがいない。同書の冒頭にある「緒言」によれば、「農舍に関するものとは家族の員数、建物の坪数、屋敷の地割、住宅の間割、其他農舍の現状を知るべき事項を、農地に関するものとは耕地の位置面積、道路水路の配置、其他農地の現状を知るべき事項を調査す」とある。調査対象の農家の抽出基準は以下による。県下各郡を農業経営状態により数区に分け、その区を代表する農村を定め、農業を主業として近年引き続き相当の成績を挙げつつある農家を選ぶ。そのなかでその地方の普通の程度の農業経営のなかから自作農・小作農各一戸を抽出する。

農地に関する調査は、自作地・小作地などの統計的な処理を加えたものが主であり、土地所有の問題は多く語られても、個別経営のなかでどのように農地が位置付けられているのか、その家族労働はどうであるのか、など経営実態を調査したものはきわめて乏しい。この資料では、地域の以下の農家が取り上げられている。

橘樹郡鶴見町東寺尾 (小作)  
 同 鶴見 (自作)  
 都筑郡中川村茅ヶ崎 (自作)  
 同 牛久保 (小作)  
 同 二俣川村本村 (自作)  
 同 二俣川 (小作)  
 鎌倉郡本郷村公田 (自作)  
 久良岐郡日下村笠下 (小作)  
 同 上中里 (自作)  
 同 豊田村田谷 (小作)  
 同 上倉田 (自作)  
 同 中川村上矢部 (小作)  
 同 阿久和 (自作)  
 この調査の「緒言」には、「石黒農政課長の指導を得て之を実施す」とある。石黒農政課長とは、当時の農商務省にあって小作調停法の成立に力をそそぎ、のちに「石黒農政」と呼ばれる時代を築いた石黒忠篤である。

資料は、自作農に比べて小作農が劣悪な条件で経営をしていたことが瞭然である。農舍についていえば、納屋を含めて三つ四部屋しかない。小屋・堆肥舎は無いか極めて小さい。農地はさら

に明瞭で、小さな農地が居宅からはるか遠方に散在している。資料には居宅からの徒歩所要時間が記入されているが、なかには往復二時間をする小作農をもつ者もいた。そのためか地主は複数存在して、田は一~二反歩あたり一人の勘定になる。このような事情は農家の成立と深い関係があることは言うまでもない。小作農は分家などによる独立ののち、零細な農地を借りながら

（小作）  
 ら（それらはおそらく地主の手作り地より生産力は低い）、劣悪な労働条件で耕作せざるをえなかつたのである。

この調査について、緒言に以下の感想が述べられている。「農舍に於ても農地に於ても不便不利甚た多く無理無謀少なからざるを認む、如何に之に適応すべき乎、（中略）此の如き農舍に文化生活を実験する端緒如何、此の如き農地に機械器具を実用する階梯如何、此の如き農業に共同計理を実施する方法如何、事例僅に五十而かも疑問百出（後略）」。

農業・農家の経営改善

の観点からすれば、自作農もなお不十分な状態にあることを認めている。そのことについては農家の自立化に専念し、この調査を指導した石黒忠篤も同意見であったと思われる。（当館蔵）

#### 岡本利吉氏純真学園二就テ（小塙英太郎氏旧蔵文書）

大正一三年（一九一四）に公布された小作調停法により、各県に地方小作官が新設された。地方小作官は小作問題が提訴されない以前に、地主・小作農の間にたつて調停をおこなう「法外調停」が主たる役割であった。昭和二年（一九二七）六月から同一八年（一九四三）六月まで神奈川県地方小作官の職にあつた小塙英太郎氏の旧蔵資料によつて、企画展示室中央の「ぞきケー

ス」は構成されている。

地方小作官の職務の重要なもののひとつに調査活動がある。小塙資料は「横

浜市史Ⅱ 資料編2 地方小作官と農

村情勢」（平成二年刊）として横浜市域に關係の深い資料群を中心に活字化されて一書に編まれている。当館閲覧室でご覧願いたいが、横浜に關係する資料で、掲載されなかつたものもある。当該資料はそれにあたる。

岡本利吉は明治一八年（一八八五）高知市に生まれた。通信省・三菱倉庫に勤務ののち、大正九年（一九二〇）に東京龜戸に消費組合龜戸共働社を開設、関東消費組合に発展させた。組合から離れた岡本は昭和三年（一九二八）に富士山麓愛鷹山中腹の葛山に農村青年共働学校を開設して、開墾や自給自足の農本自治を理念とした、農村中堅青年の育成をめざした。その一方で東京深川富川町や浅草山谷などに下町の労働者を対象に「十銭均一満腹食」の純真社食堂を開いた。昭和七年に岡本は、農本主義者の橋孝三郎や権藤成卿らと農本連盟の結成を企てるが分裂し、橋の愛郷塾生が五・一五事件に関与するによんで岡本は脱退した。都市近郊への進出を企図していた岡本の活動に共鳴して土地の提供を申し出たのが、今回の展示の「富農の経営」でのものに根ざした教化施策を展開している。消費組合運動や都市下層地区の食堂経営は賀川豊彦にも通じる。岡本は広い意味での社会運動家であり、これまでの歴史学はこのようない人物の評価を積極的におこなつてこなかつた。そして横浜の歴史に記録されることもなかつた。共働農場の牛乳は横浜市内でも販売され、純真学園を「ああ牛乳屋さんか」と評価する市民もあつたようである。岡本利吉の生涯は角石寿一『先駆者普意識』（昭和五年刊）に詳しいが別に論ずる機会をもちたい。

（柄木県益子町・小塙宏人家蔵）

（岡本利吉氏純真学園二就テ）は三井報

# 「横浜と上海」展余話

## 上海と横浜のアジア協会

先回の企画展示「横浜と上海——二つの開港都市の近代」では、両都市にあつた外国人居住地（上海租界と横浜居留地）の比較がポイントのひとつだった。展示では、どちらかといえば差異に力点が置かれたが、二つの外国人社会には共通するところも多く、また人や情報の流れもあった。展示ではあまりふれることができなかつた欧米人のアジア研究団体「アジア協会」について少しく述べてみよう。

**王立アジア協会ノース・チャイナ支部**  
上海が開港してから一四年後の一八五七年一〇月、上海在住のアメリカ人宣教師ブリッジマン（Rev. E. C. Bridgeman 補治文）やイギリス人宣教師サイル（Rev. E. W. Style 帥利）らによって上海文芸科学協会が設立された。この名称は暫定的なもので、翌年には、当初から意図されていたとおりイギリスの王立アジア協会へ加入し、王立アジア協会ノース・チャイナ支部 The North-China Branch of the Royal Asiatic Society と改称した。

会則には、会の目的として、中国およびその近隣国に関する事項の研究、紀要に論文を発表すること、図書館や博物館の創設の三点があげられている（*North-China Herald*, 1864.3.5）。

（ノース・チャイナ・ヘラルド）の支部の実質的な創立者であり、

初代の会長をつとめたブリッジマンは、日本にも舶載された漢文書『海國圖志』の基礎『四洲志』の原文の筆者であり、また『聯邦志略』の著者でもある、幕末・明治初期の日本人の海外知識、西洋認識に大きな影響を与えていた。

こうして上海でアジア協会の支部が活動をはじめた頃、上海租界の欧米人の間では開国したばかりの日本への関心が高まっていた。外交官とならんでアジア協会の主要メンバーであった宣教師たちは、早くから日本での布教を望んでいた人びとであるから、毎月開かれた例会で日本に関する報告がおこなわれるようになつたのも当然といえよう。

日本に関する最初の報告は、一八五七年一二月、第三回例会においておこなわれた。アメリカ軍艦ボーナス号のフット艦長からの書簡が披露されたもので、下田・箱館訪問記であった。翌年一〇月、正式にアジア協会支部となりた最初の例会では、ペリーの日本遠征に随行したこともある S. W. ウィリアムズ（当時中国駐在アメリカ公使館書記官）が日本に関する講義をおこなつた。そのほかポンペーが出島から寄稿したり、下田でハリスの監督のもとにおこなわれた気象観測データも

日本に掲載されている。

この間、一八五八年九月にアメリカ軍艦ミネソタ号で上海から長崎を訪れた S. W. ウィリアムズとサイルは、ハリスの修好通商条約の締結を知り、同艦付牧師 H. ウッドとともに、アメリカの三伝道本部に宣教師の日本派遣を呼び掛けている。この結果、翌年に中国での伝道経験のあるヘボンや S. R. ブラウンが横浜に着任することになった。

しかし、一八六一年一一月にブリッジマンが死亡すると協会の活動はほとんどだえてしまった。会が再建されるのは一八六四年三月のことである。

上海駐在イギリス領事パーカスが会長となり、毎月の例会も再開された（パーカスは一八六五年に日本に赴任するまで会長のポストにあつた）。横浜のヘボンや S. R. ブラウンも協力を申し出で、ブラウンは新井白石の「西洋紀聞」の英訳を紀要に寄稿している（以上おもに *Journal of the North-China Branch of the Royal Asiatic Society* および *North-China Herald* による）。

しかし日本関係の報告が長年紀要の誌面を賑わることはなかつた。その主因は、日本関係記事を掲載する媒体や日本をテーマとする学術団体がほかに出現したからである。

### 日本アジア協会

一八七二年（明治五）一〇月、日本アジア協会 The Asiatic Society of Japan が横浜で創立された。開港から一二年後である。このとき実質的な創立者となつたのが、同年四月に横浜ク

ライスト・チャーチの仮牧師として上海から赴任してきたサイルであり、すでに横浜にいた S. R. ブラウンであった。当所、上海の先例にならって王立アジア協会の傘下に入らず、独立して日本アジア協会となつたのである。かくして日本研究を主目的として例会が開かれ、紀要が発行されることになつた（本誌三九号「横浜人物小誌 E. W. サイル」参照）。

それ以前にも、ロンドンで J. サマーズが『チャイニーズ & ジャパンーズ・レポジトリ』誌（一八六三—一六年刊行）や『フェニックス』誌（一八七〇—七三年刊行）を発行しており、日本研究の発表が少しづづおこなわれていた。日本アジア協会の主要メンバーとなるアーネスト・サトウが最初に論文を發表したのもサマーズの雑誌だった。

横浜では、一八六五年に上海領事から駆逐公使に昇進したパーカスが、日本アジア協会の副会長や会長をつとめ、部下たちの日本研究を奨励した。サトウ、アストンなどイギリス外交官スタッフが日本アジア協会の有力メンバーとなり、優れた成果を生んだことはよく知られているとおりである。

上海のアジア協会支部は一九五二年に九五年にわたる歴史を閉じた。横浜で設立されたアジア協会は東京に移り、今も活動を続けている。

## 市政に生きた

## 赤尾彦作

## 横浜への出発

へ出てきたのであろうか。昭和一三年の自治制発布五〇周年記念式典で自治功労者として表彰される際、こう語っている。「當時治外法権の不当条約が存在し、外人の專横甚しく……これからは法律思想を修めねばと思ひ立ち、明治十九年来浜、横浜法律学校に入学した」と。村塾の教師から治外法権撤廃の必要性を教えられた赤尾は、外国人居留民の最も多い横浜へ出てきたという。甲州と横浜とは生糸貿易上のつながりもあつたから、このことも影響したのではなかろうか。

## 政治家赤尾彦作の誕生

青雲の志を抱いて村を出た赤尾のエピソードに次のようなものがある。父母の郷里が同じ山梨郡の樋口一葉は、小説『ゆく雲』(明治二八年)に氏を登場させていた。東京で書生をしている青年に、学問をする「赤尾の彦」が息子のやうにおかしくなるからと帰省を促がす手紙が来る場面なのだが、一葉は小説のモデルの野尻理作から話を聞いていたのである。当の赤尾は後にそれを知り、親不孝者の標本にされたと閉口しているが、向学心が旺盛な血氣盛んな青年であつたにちがいない。

では、なぜ赤尾は東京ではなく、横浜

し、当選している。代議士は一期のみであつたが、赤尾家には、原敬や横田千之助・野田卯太郎・前田米蔵・山本達雄ら政友会の大物政治家達からの書簡が残されている。なかでも横田とは、資金面を含め特に深い関係を有していたようである。これについては当館紀要第九号に述べたので、そちらを参照されたい。

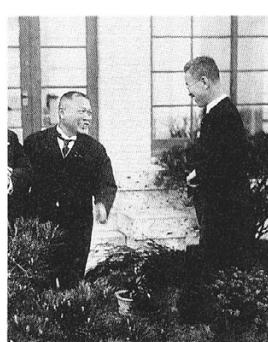
## 赤尾彦作の涙

政治家としての赤尾は二度涙を流したと回顧している。最初は、大正二年の市会議員選挙区改正問題の時である。反政友の刷新派は、全市一選挙区制(大選挙区制)案を市会で通過させたが、小選挙区制を唱える政友会の赤尾らは自党に不利とみ、内相原敬に陳情、原は県知事大島久満次を動かし、この案を廢案にした(詳細は前述紀要九号)。赤尾はこの陳情の際にボロボロと涙を流し、原を感激させたらしい。

生涯の中で一番の「快心事」であったらしく、以後単に中央―地方の政治家としての関係だけではなく、原敬の書生のような存在であつたといふ。大正三年、原が暴漢に襲われたという新聞の誤報に、赤尾がすぐさま見舞いの電報を打ち、原も早速返書をしたためているなど、そのよい例であろう。

二度目は、大正一四年、震災復興を期して前朝鮮総督府政務監の有吉忠一に市長就任を頼みにいつた時のことである。政友会と民政党が対立し政争の激しかった横浜市は、市当局・政

界・財界が一致協力する「協調市政」(挙党体制)で就任を懇願、その際赤尾は涙を浮かべて訴えたらしい。『市政春秋』は赤尾を協調市会の創作者と評している。有吉も結局受諾せざるを得なかつた。喧伝されている政友派の論客赤尾の豪胆な性格の裏に、このような情の人赤尾の姿があつた。



(左)赤尾彦作(右)有吉忠一/有吉亮氏所蔵

衆議院議員選挙に政友会から立候補

その間大正六年四月には都筑郡より

(吉良芳恵)

# 幻の『横浜日々新聞』発行計画

一冊の文書がある。「横浜日々新聞創設告文」と題するB6判、五頁、五号活字印刷の和綴じ小冊子である。

この文書は、現在、東京都三鷹市吉野泰平氏が所蔵する自由民権家吉野

泰三の旧蔵資料のひとつである。吉野

は、明治二年第一回神奈川県議選に当選、翌二年自由党準備会に参画、

一四年には府中の自治改進党、原町田

の融貫社など民権政社の創設に関わり、北多摩郡の政治指導者として当時の神奈川県政界、県下の民権運動に重きをなした人物である。

初夏の一日、この吉野家文書を展示し、併せて調査のため借出中であつた町田市立自由民権資料館を訪ね、閲覧させていただいた。案に違わず、文書は初めて見る資料であり、「横浜日々新聞」の存否、発起人名など未知の事柄ばかりであった。本文は、この時期この種文書に特有な難解な漢語交り、それから当時吉野が実際に閲読しながら打つたのか、誤植の右傍に墨点が残っている。

何はどうもあれ、先ず文書を読むことから始めよう。文中に適宜読点を加えたほか、概ね原文のままとした。

横浜日々新聞創設告文  
大凡寰宇ニ星羅碁布スル邦域、其國政

ノ体、皆其国勢ニ因リ各々旋（施か）政ノ主義ヲ異ニス、或ハ共和ニ、或ハ立憲ニ、或ハ君主擅制ノ如キ圧抑箝制ノモノアリト雖、抑モ我帝国タル皇統一系ノ君主アリテ人民ヲ慈愛シ、賢明

ノ有司アリテ之ヲ補佐ス、即チ是レ自然ノ成立ニ從ヒ純然タル特立不羈ノ実象ヲ保有スル國ナリ、其人民ハ皆ナ

同胞兄弟ナリ、兄弟ノ情誰レカ我一家ノ興隆ヲ冀ハサランヤ、世ノ政治ヲ説ク者譬へハ一家ヲ整理スルモノ、如

シ、一家和セスンハ政党自ツカラ結合ヲ為ス能ハス、然ラハ則チ同胞三千余

万ノ輯睦ハ尤モ當サニ希図スヘキ所ナ

リ、嗚呼我同胞兄弟ヨ今ノ時ハ之レ如

何ナル時ソ、内ニシテハ財政困難、士

庶窮乏、外ニシテハ魯鷺・英獅ノ爪牙

ヲ磨シ、而シテ捕獲咆哮セントスラア

リ、之レニ加ルニ條約未タ改正セス、

兵制未タ全カラス、商權未タ平均セス、

其他為メニ長大息スヘキモノ枚挙ニ遑

アラス、是レ實ニ危急存亡ノ秋ト謂ハ

サルヲ得ス、此時ニ当リ慷慨憂國ノ志

アル者、豈漫リニ空理ヲ談シ、迂説ヲ

執リ、晏然傍観ニ付シテ可ナランヤ、

ス、是ニ於テ今我党將サニ大ニ計画ス

ル所アラントシ、乃チ一社ヲ創設シ先

ノ精神ヲ發揮シ民間ニ屹立シテ大喝一大官庶ノ睡夢ヲ破シ、輿論ニ誘導シ、以テ国體ヲ聲（鞏か）固ナラシメ、以テ世界無比ナル独立ノ体面ヲ全整シ、真誠ナル自由権利ヲ振張スルノ責任ニ

当ラント欲シ、我党相謀リ爰ニ横浜

ス、而シテ此言責ヲ以テ自ツカラ任ス

ル以上ハ、一枝ノ毛管敢テ銳利ヲ干莫

ニ譲ラス、是非ヲ部判シテ諱ムコトナ

ク、公私ヲ指摘シテ憚ルコトナク、奸

佞詔諱ノ怒ヲ筆誅シ、謬妄占位ノ徒ヲ

愧死セシメ、益々自由ノ氣象ヲ固フシ、

盟テ民権ノ興起ヲ謀リ、熙々皞々自由

ノ光芒ヲシテ全國ニ耀シ、以テ開化ノ

高度ニ進ミ、文明ノ絶域ニ達セシムル

ニ非ンハ敢テ己マサルナリ、我党ト主

義ヲ同フスル者ハ固ヨリ論ナク、苟ク

モ生ヲ此土ニ稟ケ其粟ヲ食ヒ開進ノ線

路ニ歩何スル者誰レカ我党ノ主義ヲ贊

成セサラン、我党謹テ諸君力欣然踊躍

万衆齊シク左シ、彼ノ保守主義ノ謬説

ニ騙セラル、ナク翕然自由ヲ同唱シ、

相競テ分臂引援セラル、コトアランヲ

希望ス、果シテ然ラハ啻ニ我党ノ幸ノ

ミナラス実ニ全国ノ最大福祉タルヲ信

ス、仍テ概旨ヲ記シテ周ネク同好ノ諸

君ニ謀ル、諸君夫レ遲疑スルコト勿レ

ヲ開キ、左ノ件ヲ議定シテ、速力ニ新聞紙ヲ刊行スル事

一、本社ノ営設  
ノ宿所姓名、及ヒ株数等記載シ、之レニ捺印シテ本社設置マテ發起人藤山正誼方ヘ郵送報知アルヘシ

但シ、器械・活字其他諸購入ノ品価等、之レカ詳知ヲ要スル仁ハ、

枉テ來詢アレ  
明治十四年第十二月

同区戸部町三丁目七拾九番地  
横浜区太田霞第拾九号地  
大森甫

ノ宿所姓名、及ヒ株数等記載シ、之レニ捺印シテ本社設置マテ發起人藤山正誼方ヘ郵送報知アルヘシ

但シ、器械・活字其他諸購入ノ品価等、之レカ詳知ヲ要スル仁ハ、

枉テ來詢アレ  
明治十四年第十二月

新聞を発行する。株金は指定銀行で取扱うとあるが、具体的な行名は明らかにされていない。末尾に日付け、発起人総代名がある。総代大森甫の住所は横浜区太田霞、古利東福寺の坂下、大陵の横浜道沿いの町並み地である。いずれも市街地の北西部郊外にある。港場から平沼・神奈川町に至る戸部丘大森は、この直前まで政府の官吏であった。一三年の官員録に海軍省中秘書、従七位、愛知出身とある。既に七年に同省少秘書となり、同省事務畑で昇進した官僚であった。趣旨文中、自由主義を標榜しながら、「賢明ノ有司」と違和感なく高い評価を与えていたのは、このことと関係するのだろうか。

さて、本文書は、明治一四年一二月の日付で、内容は民権政派新聞の創刊趣旨書である。次の作業として、本文書作成の周辺を探るため、年表と当時の新聞を調べることにした。運がよければ、この『横浜日々新聞』の発行計画に関わる記事に出会うことを期待しながら。最初に、この時期の横浜の政治的状況を押さえておこう。一四年一月市内に顕猶社が成立、定期政談演説会を開始、三月県議定数改正で横浜区は五から一五へ増員、五月横浜商法会議所が『横浜貿易日報』を創刊、六月生糸売込商ら連合生糸荷預所を設立、九月一日開業、一〇月にかけて各地の生糸荷主、東京の主要銀行、商法会議

所などから支援を受けた売込商が、荷預所との取引きを拒否する外国商人と全面対峙、この間藤田茂吉や福地源一郎らが町会所で支援の演説会を開催、在京新聞も商権回復運動として事件を取り上げ、世の耳目を横浜に引きつけることになる。一方、国政レベルでは三月大隈参議が国会開設意見書を提出、夏北海道開拓使官有物下げをめぐり大隈や民権派が激しく政府を攻撃、諸新聞も一斉に政府の非を鳴らすなど、都下は騒然たる状況に包まれた。一〇月政変で払下げ中止、同時に大隈と政府内反対勢力は罷免され、これと前後して自由党が結成された。横浜の連合生糸荷預所事件は、一一月中旬洪沢栄一らの仲裁で和解、一二月市内の戸長ら自由主義政社を結成と、この年夏から秋にかけて、東京で横浜で民権運動、市民の政治的活動は最高潮に達した。

さて一二月に近づく程に紙面を追う目は丹念になる。果して、一二月八日付『東京横浜毎日新聞』に、藤山と大森が発起人となつて「近々横浜日々新聞」と云ふ新聞を発兌する由とある。翌一五年一月二一日付には、株金募集も既に半ばに達し近々発行予定のこと聞と云ふ新聞を発兌する由とある。一月にかけ株金募集が順調に進み、約半額の申込みに達し、株主総会開催の運びとなつたこと、しかし大森・藤山と志村の発起人内部での意見対立があり、発行が危ぶまれていることがわかる。全国的に見て、一〇年代は株式組織による新聞発行が盛んで、資本金額も一〇万円から数千円とさまざまである。千葉県議桜井静が一四年に創刊した『総房共立新聞』は、資本金一万円、一株一円で株主五三〇名を集めだが、

価新聞などというのは余程商業に熟達した者でなければ出来ない、もし自由主義の新聞を発行するというなら共に尽力しようとの志村の提案を容れて、今回の『横浜日々新聞』発行計画に変わったのだという内幕談を紹介している。続いて二四日付で志村退社の原因を詳報し、去る五日大森・藤山が志村宅を訪問、株金も相当募集済みとなつたので株主中からなるべき発起人を選び、我等は幹事となり株金取集めを補助すべしとの談話に、志村は反駁して「創設告文」の通り株金取扱いは銀行に依頼し、発起総代は大森・藤山でよいと主張、その後志村の問合せに確たる返答のないまま二〇日に株主総会開催の突然の通知があり、しかも志村が募つた株主へは何ら連絡がないことから、大いに不審を抱き、今回の脱退騒動になつた、更に脱退組四、五名の株主は、別に自由主義の新聞発行を計画中の説を報じてゐる。

一連の報道によれば、『横浜日々新聞』発行計画は、一二月から翌一五年一月にかけ株金募集が順調に進み、約半額の申込みに達し、株主総会開催の運びとなつたこと、しかし大森・藤山と志村の発起人内部での意見対立があり、発行が危ぶまれていることがわかる。全国的に見て、一〇年代は株式組織による新聞発行が盛んで、資本金額も一〇万円から数千円とさまざまである。千葉県議桜井静が一四年に創刊した『総房共立新聞』は、資本金一万円、一株一円で株主五三〇名を集めだが、

実収は二五〇〇円余、一年半で廃業した。容易な事業ではなかつた。

一月二〇日に株主総会が開かれたかどうか不明だが、二月四日付に本月二〇日頃に創刊するらしいとの観測記事があるのを最後に、消息は不明となる。

『横浜日々新聞』は、結局未刊のままに終つたらしい。新聞発行の諸資料に記録は全くない。後年、同名の『横浜日日新聞』があり、大正九年四月九日付第八二三号の一號分が赤尾彦作旧蔵資料のなかから発見されている。

この後、藤山と大森は、一五年四月二九日開催の顕猶社政談演説討論会の出席社員の中に、関島宇兵衛・斎藤忠太郎・大塚成吉ら幹部と共に名を連ねている。藤山は、このあと五月一四日、同二八日の演説会にも出席しており、一四日富竹亭で開かれた政談演説討論会では、「主治者盡ぞ民心の帰する所を察せざる」の題で演壇に立つた。両名は、『横浜日々新聞』発行計画を契機として顕猶社に加盟するようになつたのか、或いは顕猶社がこの新聞発行計画に何らか関わっていたのか、分からぬ。間もなく、七月に顕猶社は解散、両名の動向も不明である。

しかし、横浜の民権運動のなかで、一つの民権派機關紙を発行しようという計画があり、準備が進められたことは事実である。そして何より、発行趣旨書が遠く北多摩郡の民権家の許に届けられていたことは、横浜と多摩との結びつきの深さと広がりを改めて痛感させる。



## 資料館だより

前回、閲覧室の改造と書架の増設により閲覧室で直接手に取り見ることのできるようになった日本語新聞をいくつか紹介しました。外国語新聞についても、一部が閲覧室で自由に利用できるようになりましたので、今回はそれら外国語新聞をいくつか紹介します。

刊版『デイリー・ジャパン・ヘラルド』(The Daily Japan Herald) 後『ジャパン・ディリー・ヘラルド』(The Japan Daily Herald) も発行した。ハンサードの死後、本紙を引き継いだブルック(John Henry Brooke)のもとで、条約改正問題等に対する厳しい対日批判を展開した。一九一五年発行禁止となり、廃刊。

閲覧室では、『ジャパン・ヘラルド』が一八六一年一月から六五年二月まで(欠号あり)、『デイリー・ジャバ

ン・ヘラルド』が一八六四年一一月一八日と一四日号、一八六年一月二日号のExtra、『ジャパン・ディリー・ヘラルド』(Albert W. Hansard)が横浜で創刊した英字新聞。当初は毎土曜日刊行の週刊であったが、一八六三年より日刊版『デイリー・ジャパン・ヘラルド』(The Daily Japan Herald) 後『ジャパン・ディリー・ヘラルド』(The Japan Daily Herald) も発行した。ハンサードの死後、本紙を引き継いだブルック(John Henry Brooke)のもとで、条約改正問題等に対する厳しい対日批判を展開した。一九一五年発行禁止となり、廃刊。

閲覧室では、『ジャパン・ヘラルド』同様、強硬な対日批判の立場をとった。一九二三(大正一二)年、関東大震災で致命的打撃を被り、廃刊した。

閲覧室では、一八七四年五月から一九一八年一二月まで(欠号あり)、複製版で利用できる。

『ジャパン・ヘラルド』(Le Courrier du Japon)とフランス人読者を二分したが、後紙の廃刊後、日本唯一のフランス語新聞としてフランス人読者に愛読された。しかし在日フランス人勢力の衰退と財政窮屈のため、一八八五年上海へ移転、一八八六年廃刊に至った。

閲覧室では、一八七五年五月から一八八五年一一月まで(欠号あり)のものが複製版で利用できる。

(石崎康子)

### ▼展示

(1)『横浜の近代農村』 2/11~5/8  
明治・大正期以降の横浜の農村問題を多角的に紹介する。

(2)『館蔵横浜史料』展(仮題)5/11~7月下旬 開港前から明治・大正期にいたる横浜の歴史を、当館所蔵のその時の姿を表現する特徴的な資料によつて跡づけ、紹介する。

(1)『寄贈資料』  
『東京繁昌記』 一点(南区南太田)

(2)錦絵『澤村訥升』ほか 三点(神奈川県横須賀市 鈴木智子氏)  
(3)『関東震災画報』ほか 七点(鶴見区寺谷 千葉一氏)  
(4)『神奈川県公報』、錦絵『横浜港崎町大門橋真景』、「日本郵船航路ポスター」など 四四二点(緑区荏子田岡信孝氏)  
(5)『関東大震災関係新聞』『時事新報』など 一一三点(神奈川区旭ヶ丘 斎藤秀夫氏)  
(6)『大震災関係写真帖』ほか 三點(川崎市川崎区 田口隆氏)

(7)『関東大震災関係写真』 八点(川崎市川崎区 佐野美智子氏)

### ▼出版物

特別展示図録『横浜と上海――つの開港都市の近代』(頒価200円)

▼臨時休館と無料入館のお知らせ

(1)5月10日(火) 館内燻蒸のため、臨時休館します。  
(2)6月2日(火) 横浜開港記念日につき展示室への入館は無料となります。

▼ドン・ブラウン文庫(書籍)の閲覧停止

再整理のため、昨年中閲覧を停止していました同文庫の書籍を、今年いっぱいの予定で、引き続き閲覧停止といたします。なお同文庫の新聞・雑誌については、これまでどおり閲覧できます。

利用者のみなさまのご理解とご協力

をお願いいたします。

▼神奈川近世史研究会編『江戸時代の神奈川』の刊行

平成五年一月三日から有隣堂文具館七階において「古絵図でみる風景―江戸時代の神奈川―」展が開催された。この展示は神奈川県文化財協会が主催し、当館も後援団体として所蔵史料を出品した。また、展示開催を記念して有隣堂から『江戸時代の神奈川』(定価三千九百円、購入希望者は有隣堂、261-1245まで)が刊行された。この本には当館所蔵の黒船来航関係史料をはじめ、国絵図や県内各地の村絵図、東海道や鎌倉・江の島などを描いた絵画が多数収録されている。

『H.P.-D.N.-ジャポン』(L'Echo du Japon) 複製版

『H.P.-D.N.-ジャポン』(Cerf-Lévy)が一八七〇(明治三)年横浜で創刊した日本最初のフランス語新聞。一時一八七九年創刊の『クーリエ・デュ・ジャポン』(Le Courier du Japon)とフランス人読者を二分した